

戦略対話を目指して

石井 明

今回の日中の学者のユーラシア対話は「戦略対話」と銘打たれている。これまで戦略的な対話は日本の学者にとっては不得手とみなされてきたのではないだろうか。

もう 30 年以上前になるのだが、鈴木秀夫著『森林の思考 砂漠の思考』（日本放送協会 1978 年）という本が評判になったことがある。同書は、大胆にも人間の思考方法は森林の思考と砂漠の思考の 2 つに分けられる、と言い切る。森林的思考とは、視点が地上の一角にあり、下から上を見る姿勢であり、砂漠的思考とは上から下を見る鳥の眼を持つことであった。

著者によれば、日本は森林的思考の世界であり、森林の人間の視点は地上の一点にあつて、視界の及ぶかぎりの事物を丹念に調べ、その知識をきちんと整頓する、視界の及ばないところは研究の対象外。一方、砂漠の人間は、今見えている範囲の事物に関する知識を深めるよりは、見えていないところの知識を多く持つことの方により多くの関心を有する。水があるかも知れないし、ないかもしれない、よくわからない、というのでは砂漠では生活できない。あると考えて行動するか、ないと判断して反対の道をとるか、であり、鳥の眼で、上から鳥瞰して決断するわけだ。

著者はこのように述べて、森林の科学者はミクロの分析にたけ、職人氣質であるのに対し、砂漠の科学者はマクロの統合に秀で、広い世界を知りたい、自分が何ものかを明らかにしたくて学問をする、と指摘している。

ここで言われている砂漠的思考は実は戦略的思考と呼ぶべきものではないだろうか。戦略的に考えることは外交の世界でも強く求められる。一つ例をあげる。中国は 1971 年 10 月、国連に加盟。1972 年 2 月、ニクソン訪中により米中関係が改善し、米中ソの「大三角関係」が出来上がった。毛沢東、周恩来の関心はまだ外交関係のない西ドイツと日本に向けられる。同年 7 月 24 日深夜(25 日未明と言った方が正確だろう)、西ドイツとの交渉にあっていた王殊(後の駐西ドイツ大使)は、周恩来から、「現在、日本と西ドイツはともに我が方と国交を樹立する可能性がある。もし我が方先に西ドイツと国交を樹立すれば、日本に影響を及ぼすだろう。また、先に日本と国交を樹立すれば、西ドイツの背中を押すことになる」という話を聞く(王殊『中徳建交親歴記』 世界知識出版社 2002 年)。

日本が国交を樹立したのは 1972 年 9 月 29 日で、西ドイツとの国交樹立は 10 月 11 日であり、日本の方が早かった。9 月 30 日の『人民日報』第 1 面は、日本との国交樹立関係記事で埋め尽くされていたが、わずかに右下の隅に、西ドイツとの交渉の進捗状況を報じた記事が載った。この記事には、西ドイツに早く国交を樹立せよと迫る中国指導部のシグナルが込められていたと見ることはできるのではあるまいか。

当時の日本では、日中関係を中国のように、対外関係の中の一つの 2 国間関係とみなして、他の 2 国間関係と並べながら操作するような余裕はなかった、といえる。それから 35 年以上たち、2008 年 5 月、訪日した胡锦涛国家主席は当時の福田康夫首相との間で、今後

の日中関係の基本方針となる「戦略的互惠関係の包括的推進に関する共同宣言」を発出した。この宣言では、これからの日中関係の課題として、2 国間関係の強化のみならず、アジア太平洋地域への貢献、グローバルな課題への貢献が挙げられている。

実は、日中国交正常化 20 周年にあたる 1992 年の 4 月、江沢民中国共産党総書記が来日した際の歓迎宴で、当時の宮澤喜一首相は、日中関係が単に 2 国間、あるいは地域的な関係にとどまらず、すでに「世界の中の日中関係」という新たな段階を迎えていることを強調していた。当時の中国は日本が政治大国化することを容認しており、その経済的地位にふさわしい政治的役割を發揮することを認めていた。未来志向の日中関係が強調され、アジア太平洋地域、ないしは全世界の直面する諸問題について、日中が責任を分担しながら協力していく態勢ができたかに見えた。しかし、歴史問題が再燃し、日中関係は暗転、2008 年によりやく戦略的關係構築という共通の土俵ができたのであった。今までは歴史問題に足を引っ張られ、戦略対話の条件がなかったが、これからは不得手だからと言って、戦略対話に尻込みするわけにはいかない。日中間で様々なレベルの戦略対話が行なわれるべき時に来ているのだ。

中国側主催者の国務院発展研究センター欧亜社会発展研究所の李鳳林・元ロシア大使は、中国は外国との対話で、第 3 国の問題を議論することは通常はない、と言い、旧ソ連の問題について議論する今回のフォーラムが極めて異例の会合であることを強調していた。確かに日中間で日中の問題を議論することは数多くあるが、ユーラシア(旧ソ連)の問題を中心に議論するのは初めての経験だろう。

さて、今回のユーラシア対話だが、岩下報告は日米中露「四角形」がどうなるのか、特に日露関係がどうなるか、について議論。北方領土問題の解決可能性は遠のいたが、日露関係は新たな段階に入った、と主張した。中国側から日露関係の見通しについての質問が相次いだ。岩下教授は、北方領土問題がある限り日本はロシアとの関係を深めることができない、というわけではない、北方領土問題はこれからも長期にわたって解決しない、しかし、日露関係は進むという「予見」を繰り返した。

この議論を聞きながら思い出したのは、1982 年、鄧小平が提起した、中ソ関係正常化のための 3 大障害の除去要求である(中ソ国境・モンゴルからのソ連軍の撤退、アフガニスタンからのソ連軍の撤退、カンボジア問題の解決)である。歴史問題(国境問題の解決)を正常化の条件から外し、現実問題(中国の安全保障に脅威を与えていると中国が認識している問題)の解決を新たな条件にすえたのである。ソ連側は当初、中国側の意図を測りかねたのであるが、外務次官級の協議に応じた。中ソは、国家関係が一定の改善をみた段階で、別途、国境問題を解決するための次官級の協議を始める。1989 年に両国関係は正常化するが、その後も両国は国境問題の討議を続けた。鄧小平のイニシアチブは実を結んだのである(中越も、中ソと同じ流れで、関係正常化、そして国境問題の解決に向かった)。この一連のプロセスは、国内の歴史問題への執着を押さえこむには、強力な政治のリーダーシップ、剛腕投手の存在が不可欠だ、ということを明らかにしている。

一方、関貴海・北京大学国際関係学院副院長は、米国の絶対優勢が揺らぐなかで、中国、ロシア、インドなど新興諸国を代表する力が増大している、と指摘し、現在の三角関係は冷戦期の戦略三角関係とは違う、すなわち三国間には全面的な対抗はなく、競争のなかでの協力関係があり、どの一方も他の二方と良好な関係、少なくとも正常な関係を持ちうる、と主張した。

伊藤融・防衛大学校専任講師の報告はインドの側から大国関係を考察しており、ロシア、中国、米国、日本との間で次々に「戦略的パートナーシップ」関係を宣言したことを明らかにしている。伊藤報告はこうしたインド外交の「成功」は、インドが大国にとって「付き合うのに都合の良い国」であった西側諸国にとって対中けん制カードとして、中露にとっては米一極支配に対抗する対抗軸形成としての意味を持っていたことを明らかにしている。しかし、オバマ政権誕生後、こうした環境に変化が生じており、中国の急速な成長とオバマ政権の中国接近によって、中国は露印中の枠組みに関心を持たなくなっていることを明らかにしている。

むろん、会議はこうした大状況についての報告だけあったわけではなく、経済を含めユーラシアの個別のトピックについての手堅い報告もあった。いや、こうした報告の方が多かったと言ってよいだろう。ロシア経済の動向についても様々な角度からの検討の結果が報告された。今後はこうした報告の成果を吸収し、共通の糧としたうえで、大状況についての議論を深めていくことが望ましい。実は次回、議論すべきテーマの候補はすでに明らかにされている。

会議の最後に、李鳳林大使が早々と次回の会議で議論すべきテーマとして、次の7項目を挙げた。①多極化、②三角形・四角形・五角形、③ロシアの発展戦略、④2012年の大統領選、⑤ロシアの頭はヨーロッパで、体はアジアだが、どう一体化するのか？、⑥極東・シベリアは東アジアの一体化に関わることを希望している。一体化のなかでロシアはどの位置にあるべきか？ ⑦大国関係(筆者のメモによる)。こうしたテーマについて掘り下げた議論をしようというわけだ。今回の会議は第1回日中ユーラシア対話と名付けられているので、次回はこれらの中からテーマが絞り込まれると思われる。今回同様、率直な議論が交わされることを望む。

筆者は会議中、秘かに考えていたことがある。『東周列国志』を読もう、と決めたことだ。戦場で兵馬戦い、血わき肉躍る、といった本もよいが、この本は、東周(春秋戦国)時代、列国が外交によって国力の弱さをカバーし、国益を増進させようとしていたことが書きこまれている(はずだ)。合従の策とか連衡の策とかを駆使して。原文はむつかしいので、現代中国語のリライトしたものを買ったし、さし絵入りのものもあったはずだ。東周時代は、軍事力だけですべてが決まるわけではないところなど、現代と相通じるところがあるように思えるのだ。



